

カントにおける超越論的対象の問題

木村勝彦

一

経験の範囲を人間理性の限界として見定めることに従事しながら、I・カントは、まさにその経験を越えるものへの目差しを決して放擲しない。むしろカントの思索は、経験を越え、人間の認識能力の域外にある物自体の存在を前提することから始まっている。それは、やがて「実践的Ⅱ教説的」(praktisch-dogmatisch)な形而上学の理念へと結実して行く構想の根拠として、カントの思想的営為の底流を形成し続けていたのである。しかし、カントの関心が多岐にわたるのに応じて、物自体の問題も様々な射程から論じられ、その都度様相を異にして来る。つまりカントは、物自体という概念で自らが意図していることを、多様に言い換えるのである。根柢には一つの構想が貫かれている。しかし時として、カントの論述は明晰さに欠け、言い換えが中途半端なままに終わってしまう。重要なのは、物自体説の諸相を、それが各々如何なる問題領域で必要とされていたのかという点から解明し、その間の連絡を的確に把握することである。

考察の対象を、『純粹理性批判』における超越論的觀念論の成立という場面に限定しよう。カントはここで人間理性の根源的有限性を承認する。それは、人間の認識が感性の受容性、つまり内容的素材の所与性から始まるということである。カントは受容というこの特殊な事態を説明するために、物自体による触発という考え方を導入する。超越論的觀念論は、「対象が何らかの仕方であれわれの心を触発する」(A.19/B.33)ことを前提しなければ、一步も踏み出すことができない。直観が生じるのは、「対象がわれわれに与えられている」(ibid.)限りでのみだという創見を、カントは物自体という「客観の現実的存在」(B.72)を承認することで初めて獲得し得たと言つてよい。人間という特殊な認識主観の有限性を決定するのは、触発する物自体である。それゆえカントは超越論的觀念論の核心に、否応無く、物自体の超主観的实在性を据えなければならぬ。「超越論的感性論」は、こうした受容の構造を確認することに捧げられている。

しかし、物自体によって受容性を説明しようとするカントの試み

が、直ちに超越論的観念論そのものを崩壊の危機に曝すことは周知の通りである。現象を主観における表象として捉え、そのみを見識可能なものとするのが、超越論的観念論の根幹に他ならない。

しかしながらカントが、主観の外にあって触発する物自体を現象の原因として措定する時、認識論としての整合性は破綻していると思われる。例えば、カントは物自体を、「外的で物体的な諸現象の絶対的且つ内的な原因」(A 394)と呼ぶ。しかし、如何なる根拠があって、物自体と現象との間に因果関係が想定されるのか。超越論的観念論はカテゴリーの適用を現象に制限した筈であった。原因性のカテゴリーを物自体に適用することで、カントは明白な自家撞着に陥っている。この点で超越論的観念論は、超越論的實在論の克服を目指す学説でありながら、まさにその当面の敵と同じ立場に立つことになってしまう。⁽²⁾多くの解釈者達がそのように考えて、物自体の概念を払拭することに意を注いで来た。⁽³⁾しかし、カントの形而上学的構想に裏打ちされている、或いはむしろそれを根拠付けている物自体概念を払拭することは許されない。カントの真意は常に形而上学に向けられているからだ。たとえ超越論的観念論を擁護するためにも物自体概念を排除するとしても、その際、物自体無くしては超越論的観念論そのものが成立しない、という根本的な事態が看過されてしまうことになるであろう。

このように、超越論的観念論の内部において、物自体は極めて困難な概念となっている。そしてこのことを考察する際、重要な意味を担って来るのは超越論的対象の問題である。カントは多くの箇所、物自体と超越論的対象とを同一視して論じている。しかし、両

者は互いに截然と区別されるべき側面も有しており、決して安易に同一視することはできない。探究すべき点は、何故カントが物自体を超越論的対象として把握し直したのか、そしてそれは如何なる局面においてであるのかということだ。本稿は特にこの点的を絞り、カントの物自体説の一面を照射しようとするものである。

二

超越論的対象 (Gegenstand) 或いは超越論的客観 (Objekt) という語は、特定の局面を除くと、ほとんど物自体と同義に用いられている。「われわれが物質と名付けているこの現象の根拠たり得る超越論的客観は、単なる或るものである。たとえ誰かがそれをわれわれに語ることができるとしても、その何であるかをわれわれは決して理解し得ない」(A 277/B 333)。或いはまた、次のようにも述べられている。「これらの表象の非感性的原因は、われわれにはまったく知られていず、したがってわれわれはこれを客観として直観することはできない。……それにもかかわらず、われわれは単に受容性としての感性に対応する或るものをもつために、現象一般の単に叡知的な原因を超越論的客観と名付け得る。われわれはこの超越論的客観にわれわれの可能的知覚の全範囲と全連関とを帰し、超越論的客観は一切の経験に先立ってそれ自体として存するものだ、と云うことができる」(A 494/B 522f)。

引用の文章が問題としているのは、現象の根拠、或いは原因である。しかもそれは「非感性的」「叡知的」な原因であり、一切の感性的直観を捨象して、つまり「一切の経験に先立ってそれ自体とし

て」考えられねばならないようなものだ。ここで触発する物自体が想定されていることは、容易に看取される。このことを明瞭に表現しているのは、次の箇所である。「現象とはそれ自身は物ではないから、現象の根柢には現象を単なる表象として規定するような超越論的対象が存しなければならぬ。そうするとわれわれがこの超越論的対象に、それが現象するための性質の他になお、その結果は現象の中に見出されるにもかかわらず、自らは現象ではないような原因性をも付加することを、何ら妨げるものはない」(A 538f/B 566f; 傍点引用者)。傍点部分は明らかに物体を示唆している。現象として認識される「この同じ対象を物自体としても、……考え得るものでなければならぬ」(B XXXV)と述べられていることを、思い出してみればよい。

カントはここで、われわれの表象の原因ではあるが、表象の外にあり、感性的直観の制約を離れているがゆえに認識不可能な物自体を、超越論的対象と言ひ換えているのに過ぎない。それによってカントが問い直しているのは、触発と受容との関係、すなわちわれわれの表象が物自体の触発によって生じるといふ事態である。成り立ちが物自体の触発に由来する以上、表象は物自体に対応していなければならぬ。つまり、現象には「それ自身は現象でない或るものが対応していなければならない」(A 251)のだ。ところが、この「われわれの外にある」(A 372)物自体については、「われわれの外的直観」(ibid.)の原因だということがただ単に認識され得るのみで、如何なる直観もそれ自身に関しては与えられない。したがって、物自体としての「対象は単に超越論的」(A 247/B 304)だと

言わざるを得ない。現象を「その超越論的対象が知られていない表象」(A 191/B 236)と規定することで、カントの問いの所在は明白に示されている。

だがこのような観点から物自体を超越論的対象と言ひ換える時、カントの真意は何処に存するのだろうか。それはカントが、超越論的観念論の枠内においては、もはや物自体という対象そのものは主題にしないということだ。カントは飽くまでも、物自体を表象との関係において論じようとする。主要な関心事は、常に認識批判なのである。「表象と対象との関係についての問いは超越論的である」(A 46/B 63)と、カントは述べる。そして物自体は、「こうした問題枠の中で、超越論的対象と言ひ換えられるのである。それはつまり、「対象の概念を超越論的意味にまで高める」(A 190/B 235f)ということに他ならない。G・ブラウスに依るならば、「経験的水準」(die empirische Ebene)から「超越論的反省の水準」(die Ebene der transzendentalen Reflexion)へと「登りつめる」(Ersteigen)ということなのだ。たとえ「超越論的客観そのものは依然としてわれわれには未知のまま」(A 46/B 63)に留まるとしても、そうした超越論的反省によって新たな問いの地平が見出されて来るのである。「現象そのもの(それ自身はやはり何ものでもない)における多様は如何にして結合されるのであろうか」(A 191/B 236)という問いがそれだ。つまり表象の統一が問題となる。そこから更に(先に言及したように)、表象と「表象とは区別された客観」(ibid.)との合致の問題も、カントの前途に現出して来る。それは表象の統一の源泉を、主客両方に求めるといふことである。物自体を超越論的対

象と言い換えることによって、カントは概ねこのような思索の展開を企図していると思われる。物自体の触発を説いて超越論的観念論に途を拓いた「超越論的感性論」も、唯一度、超越論的客観という語を載せることによって、既にこの新たな道筋を指し示しているのである。その意味では、物自体と同義のものとして論じられながら、超越論の対象という概念は物自体とはまったく別な問題領域に根差している、と言わざるを得ない。

先にわれわれは、特定の局面を除くと、カントは超越論の対象を物自体とほぼ同義に用いていると述べた。そして実はまさにこの特定の局面において、超越論の対象の概念は、今指摘したような特質を十全に發揮するのである。特定の局面とは、第一版のいわゆるカテゴリーの演繹論の部分と、「すべての対象一般をフェノメノンとヌーメノンとに区別する根拠について」という章（以下、「区別」の章と略記）とである。ここにおいてはもはや、超越論の対象と物自体とは互いに截然と区別されねばならない。

ところで、これら二つの当該章に関してまず顧慮されねばならないのは、両者が第二版において大幅に改訂され、超越論の対象及び超越論的客観という語がまったく削除されているということである。N・K・スマイスはこの事態を重視し、結局、超越論の対象は物自体と同一のもののだと考える。そして、「前批判的な、或いは半批判的な残滓」とも言うべき超越論の対象に関するこの所説は、早い時期の原稿に依るものだとし、自らの「パッチワーク・セオリー」の有力な論拠とするのである。しかし、このような考え方は、H・J・ペイトンが指摘しているように、物自体或いは超越論の対象の

概念が超越論的観念論の根幹に位置するという事実を誤認している点で、排除されなければならない⁽⁷⁾。またカントは第二版での書き換えについて、それが企図しているのは、論述の「難解さと不明瞭さとをできるだけ除去する」(B XXXVII) *to be made plain* であり、「命題そのものやその証明根拠、計画の形式と完全性については何一つ変更すべきものを見出さなかった」(ibid.)と述べている。カントが一貫して追究しているのは、思维の主観的制約が如何にして客観的妥当性をもつか、つまり対象のあらゆる認識の可能性の制約となるか」(A 89f/B 122) *to be done* である。端的に言うならば、「総合的表象とその対象とが合致する」(A 92/B 124) とは、如何なることをカントは問うているのである。演繹論の改訂は、ペイトンが述べているように、「同じ学説をより明快に説明しよう」とする努力に他ならない。超越論の対象が物自体とは截然と区別される役割りを付与されて吟味の俎上に載るのは、第一版に固有な部分においてである。しかし、表象の総合統一を遡求するというカントの基本的な意図は、書き換えを通じて一貫していると思われる。

三

第一版の演繹論を考察してみよう。ここで超越論の対象という考え方は、直観的表象が成立するための条件を遡求するという路線の上に現出して来る。直観によって与えられるのは単に多様である。これのみでは対象は成立しない。対象が成立するためには、多様が「一つの表象」(A 99) に統一されなければならないのだ。それでは、そもそも表象が統一されるとは如何なることであろうか。カン

トの論述はこの根源的な問いに導かれて、総合作用の探究へと向かう。そして、「直観における覚知の総合」から「構想における再生の総合」を経て、「概念における再認の総合」へと進み、遂にはそれらすべての総合の根柢に作用する「一つの意識」(A 104)に至るのである。この「一つの意識」が超越論的統覚 (die transcendente Apperzeption) であることは、言うまでもない。それは「すべての可能な表象に一貫した自己同一性」(A 116) である。こうして、表象の統一の「根源的且つ超越論的な条件」(A 106) は求められた。だがカントは直ちに問いを重ねる。「表象の対象という表現において、いったい何が意味されているのか」(A 104)と。およそ認識である以上、それは「一つの対象に関係すべき」(Ibid.) だからである。そしてカントは、「表象の対象」についてこう述べている。

「先に述べたように、現象そのものは感性的表象に他ならず、またこの感性的表象は、そのままの在り方のそれ自体としては(表象能力の外にある)対象とみなされてはならない。われわれが、認識に対応し、したがってまた認識から区別された対象について述べる場合、いったい何を意味しているのだろうか。この対象が或るもの一般 (etwas überhaupt) = X としての思惟されなければならないということは、容易に洞察され得る。なぜなら、われわれは自らの認識の外には、この認識に対応するものとして対置し得るようなものを、何ももってはいないからである」(Ibid. 傍点引用者)。

要するに「表象の対象」とは、「認識に対応」しながら、「認識から区別された」対象であり、「或るもの一般 = X」としか言いようのないものである。換言するならば、「表象能力の外」にあり、「あら

ゆる表象と異なった或るもの」(A 105)に過ぎない。表象の多様性のみ関係するわれわれにとって、それは「無」(Ibid.) である。カントはこのような規定を施すことによって、何を目論んでいるのだろうか。次の部分は、その点を明確にしている。「今やわれわれはまた、対象一般というわれわれの概念をより正しく規定でき得るであろう。あらゆる表象は表象である以上、その対象を有し、それ自身がまた他の表象の対象たり得る。現象はわれわれに直接与えられ得る唯一の対象であり、現象において対象と直接に関係するものが、直観と呼ばれるのである。しかしこれらの現象は物自体ではなく、それ自身単に表象であって、表象はまた自らの対象を有する。それゆえこの対象は、もはやわれわれによつては直観され得ない。したがってそれは非経験的すなわち超越論的对象 $\text{||} \times$ と名付けられるのである」(A 108)。言うまでもなく、カントがここで問題としているのは、もはや個々の物自体ではない。検討的は、「超越論的意味」へと高められ、「対象一般」として把握し直された対象の概念である。「表象能力の外」にあるものとして「非経験的」な以上、具体的な直観の内容はそこからまったく捨象されている。統一されたわたしの表象が成立する場面を追究するという超越論的な問題設定において論じられるべき対象は、個々の直観に対応する個々の諸物自体ではなく、もはや無規定な「対象一般」「或るもの一般」としか言表しようがないものである。カントはそれを、超越論的对象と称する。

繰り返し指摘して来たように、カントの根本的な関心は、超越論的観念論の枠内において「総合的表象とその対象とが合致する」と

は如何なることかを見究める、という点に存する。表象の統一は超越論的統覚によって保証された。総合的表象の根柢には、それをわたしの表象として意識する自己の同一性があるのだ。そして超越論的対象は、このような表象の対象として論述の中に導入される。この時カントは当然、超越論的対象を超越論的統覚の総合的統一との明確な対比において考えているのである。それによって、カテゴリーの客観的妥当性つまり認識の客観性（表象と対象との合致）が保証されるといふ見通しを、カントはもっている。「この超越論的対象（それは実際はわれわれのあらゆる認識において常に同一のものⅡXである）」という純粹概念は、われわれのあらゆる経験的概念一般に対して、対象との関係、つまり客観的實在性を与え得るものである。この概念は明瞭な直観をまったく含み得ない。したがってそれは、認識の多様が対象と関係する限り、その多様の内に見出されねばならねばならないような統一に関するものに過ぎないであろう。しかし多様と対象とのこの関係は、意識の必然的統一に他ならず、したがってまた、多様を一つの表象に結合するという心の共通な機能による多様の総合に他ならない」（A 109、傍点引用者）。

カントの目論見は、超越論的統覚と超越論的対象とを両極に据えることによって、表象に統一を与えるということである。すなわち超越論的対象は、すぐれて認識論的な機能を果たすべきものとして、想定されているのである。超越論的対象とは「あらゆる認識において常に同一のもの」であって、各々の現象についてまさに「現象するもの」として考えられる物自体の概念とは、本来的にその立ち現われるべき局面を異にしている。

第二版においてカントは、超越論的対象及び超越論的客観という語を演繹論から削除する。そして更に、第一版とは叙述の順序を改め、根源的統覚（die ursprüngliche Apperzeption）或いは純粹統覚（die reine Apperzeption）から直観的形像に進むという方法を採用している。言うまでもなく、表象の総合的統一における根源的統覚の意義についてカントの理解が更に進み、純化されたのである。第二版の演繹論は、「わたしは考える」は、すべてのわたしの表象に伴い得なければならぬ」（B 131）という命題を、考察の起点としている。換言するならば、このことは、超越論的対象の役割りが結局は超越論的統覚に取って代わられるべきものだった、ということの意味している。そして同様の事態は、次に論じる「区別」の章においても認められるのである。

四

「区別」の章は、まず「超越論的分析論」の成果について「総括的概観」（A 236/B 295）を施すことから始め、この部分は両版とも共通している。その際のカントの意図は、端的には概念の超越論的使用と経験的使用との区別を確認し、前者を排除するというところである。思惟とは「与えられた直観を一つの対象に関係せしめるといふ働きである」（A 247/B 304）から、カテゴリーは可能的経験の一般的条件である感官の対象にのみ関係し得る。したがって、われわれの感性的直観という制約を顧慮せず、「物一般及び物自体」（A 238/B 295）にカテゴリーを適用することは許されない。感性的形式的条件を欠いたカテゴリーは、確かに「超越論的意味」（A 248/

B 305) を有しはするが、決して「超越論的使用の内にはない」(ibid.) のである。このような点を確認して、カントは論述を展開する。つまり、「すべての対象一般をフェノメノンとヌーメノンとに区別する根拠について」の問いが、主題化されるのである。この区別は超越論的観念論の基幹をなしているものであり、カントはこれを批判的立場から認容され得るものとして擁護しようとする。しかしここで留意されなければならないのは、E・アディックエスが指摘しているように、「区別」の章は「超越的なものの現実的存在にではなく、認識の確実性と射程とにのみ関わっている」ということである。こうした問いの所在を見損う時、カントが第二版で書き換えを行ない、超越論的对象を削除した理由は不分明なままに留まる。今述べたように、この「区別」の章においても、超越論的对象(超越論的客観)は第一版特有の思想として導入されるのであり、事態は演繹論の場合と対応している。カントは次のように述べる。「われわれの表象はすべて、実際、悟性によって何らかの客観に關係付けられる。そして現象とは表象以外の何ものでもないのであるから、悟性は現象を感性的直観の対象としての或るもの(Etwas)に關係付ける。しかしこの或るものは、その限りに於いて、単に超越論的客観であるに過ぎない。これは或るもの Π を意味するのであるが、われわれはそれについて何も知っていないし、一般に(われわれの悟性の今の機構によつては)何も知ることができない。むしろこの或るものは、悟性がそれによつて直観の多様を一つの対象の概念にまとめる統覚の統一の相関者(ein Correlatum)として、感性的直観の多様の統一に役立つのみである」(A 250, 傍点引用者)。

傍点部分は、超越論的客観に付与された機能を、明瞭に説き明かしている。あらゆる総合的統一の根柢において働く統覚は、今やその「統一の相関者」である超越論的对象との相関関係の内にもたらされる。そして超越論的对象は、対象認識の成立に関して、重要な意味を担うことになるのである。

超越論的对象は特定の対象ではなく、対象一般であつて、この概念は経験の個々の諸対象を抽象し尽した所で得られる。しかも超越論的对象は表象との因果関係において想定され、統一の根拠として感性的与件に即して機能しなければならないのだ。それゆえカントは次のように述べる。「この超越論的客観は感性的与件とはまったく切り離され得ない。切り離されれば、超越論的客観がそれを通じて思惟されるものが、何も残らないことになるからである。したがつてこの客観は、認識の対象そのものではなく、対象一般という概念の下での諸現象の表象であるに過ぎない」(A 251)。超越論的对象はその本性上、感性的与件を離れては何らの意義も有し得ない。しかし対象性一般の概念である超越論的对象は、「或るもの一般というまったく無規定な思想」(A 253)として、「あらゆる現象に対して同一」(ibid.)なのである。

このようにカントは演繹論の意味に立ち戻つて、むしろそれを徹底する形で超越論的对象の概念を論じている。しかし「区別」の章の主題はフェノメノンとヌーメノンとの区別を根拠付けること、就中、ヌーメノンの意義を確定することにある筈だ。論旨を錯綜させるといふ困難に陥りながら、ここに敢えて超越論的对象の問題を挿入することで、カントは何を企図していたのであろうか。答えはカ

ント自身が明白に述べている。超越論的対象は「ヌーメノンとは言えない」(A 253)のである。つまりカントは、超越論的対象という「まったく無規定な思想」との対比にもたらずことで、ヌーメノンが指し示す領野を際立たせようと試みているのだ。カントはヌーメノンについて、こう述べている。「もしもわたしが物を単に悟性の対象であると、そしてそれにもかかわらず、感性的直観ではない或る種の直観に対して(すなわち知的直観に対して)対象として与えられるものであると想定するならば、その物はヌーメノンと呼ばれる」(A249, 傍点引用者)。この定義に関しては、G・マルティンが、現象の相関者(das Korrelat)とされたものが直ちに非感性的直観の対象としても規定されている点を指摘し、そうした推論の正当性を否定している。⁽¹¹⁾しかしいずれにせよ、カントはここで「知的直観に対して対象として与えられる」ようなヌーメノンを考え、それを超越論的対象と対比させているのである。無論、そのようなヌーメノンの概念は「決して積極的なものではなく、何らかの物についての規定的認識でもなく」(A 252)。しかしH・E・アリソンが指摘するように、ヌーメノンの概念が「豊かな意味において解される」べきものである限り、それは超越論的対象の概念からは「区別されねばならない」⁽¹²⁾のである。

第二版においてカントは、超越論的対象の概念を削除し、代わりにヌーメノンの規定を精密に行なっている。「もしもわれわれがヌーメノンということにおいて、物を直観するわれわれの仕方を捨象して、われわれの感性的直観の対象でない物を理解するならば、これは消極的な意味におけるヌーメノンである。しかしこれに対して、

われわれがヌーメノンということにおいて、非感性的直観の対象を理解するのだとしたら、われわれは或る特殊な直観様式、すなわち決してわれわれのものたり得ず、またわれわれにはその可能性を洞察することさえできないものである知的直観を想定していることになる。そして、これは積極的な意味におけるヌーメノンである」(B 307)。カントはこの区別を承けて、「われわれによってヌーメノンと名付けられ得るもの」(B 309)は、ただ消極的な意味におけるヌーメノンのみだと結論付ける。これが「感性的認識の客観的妥当性を制限」(A 254/B 310)、「感性の専横」(A 255/B 311)を抑えるための「限界概念」(A 255/B 310)と呼ばれることは、周知の通りである。⁽¹³⁾消極的な意味におけるヌーメノンを「限界概念」として蓋然的に承認するという意図は、既に第一版にも認められるのであり、アリソンはこの点を鋭敏に見究めている。すなわち、第一版におけるヌーメノンと超越論的対象との区別が、第二版における二つのヌーメノンの区別へと展開した、とアリソンは考えるのである。⁽¹⁴⁾この見解は承認されてよいであろう。対象一般という無規定な思想である超越論的対象は、統覚と共に表象の総合的統一の源泉をなしはするが、まさに無規定だというその点で、消極的な意味におけるヌーメノンの蓋然的評価と異ならない。「確かにこうした対象に対して余地を与える蓋然的思考も、ただ空虚な空間(cum leaer Raum)と同じように、経験的原则を制限することのみ役立つ」(A 259/B 315)。

「区別」の章において、超越論的対象はヌーメノンとの対比で論究されているが、その基本的内容は演繹論の場合と変わらない。カ

ントは超越論の対象を無規定な対象一般と捉えることにより、一貫して表象の統一というものを探り続けているのである。しかもそれによって同時に超越論の対象は、消極的意味におけるヌーメノンと等置されるような、限界概念としての役割りも果たす。具体的直観の内容をすべて捨象して、対象性をつきつめた所に成立するのが、超越論の対象の概念であった。だがいずれにせよ、カントは超越論の対象の概念を、その「蓋然的評価を實踐理性の側から拡張」¹⁵⁾され得るような(積極的な意味における)ヌーメノンとは、明確に區別して用いているのである。

五

このように考察して来ると、物自体と超越論の対象とは、決して安易に同一視され得ない。確かに本稿が採り上げた二つの特定の場面以外では、超越論の対象は物自体とほぼ同義的に用いられている。その場合に問題となっているのは、現象の根拠・原因を求めるということである。だが超越論の対象とは飽くまでも、対象一般或いは物一般として想定されているのであり、個々の現象に関してその根拠に想定される諸物自体とは判然と区別されるのである。物自体の概念は極めて形而上学的な性格を有しており、触発は認識における原初的事実として受け入れるしかないものである。超越論的観念論はこのことを前提しなければ、学説として成立し得ない。なぜなら、超越論的観念論がわれわれに認識の領野として確定する現象は、「われわれの感官がこの未知なる或るものによって触発される仕方」(IV, 314)に他ならないからである。したがって悟性は、「現

象を認めることによって、同時に物自体の現実的存在(Dasein)をも承認する」(IV, 315)ことになる。

これに対して超越論の対象は、当初からすぐれて認識論的な意義を担わされている。そもそもそこには、対象を「超越論的意味」に高めるという超越論的反省が介在している。カントは物自体を超越論的对象と言ひ換えることによって、超越論的観念論が孕む困難を新たな認識の地平で解消しようと試みているのだ。超越論的観念論の困難の根は挙げて物自体概念に由来する。しかもカントは決して、自らの思索から物自体概念を払拭し得ないのである。それゆえカントは物自体を超越論的对象と言ひ換えねばならない。アディクエスの次のような指摘は的を得ている。「超越論的对象の概念は、著しく形而上学的な性格をもっている物自体の概念とは決して同一ではなく、純粹に認識論的な領域において、或る程度その代用品ないしは代役となるに過ぎない」¹⁶⁾。

しかしカントの試みは挫折し、経験の可能性の問題に関わる超越論的对象の役割りは、超越論的統覚の統一に取って代わられてしまうのである。超越論的对象の問題はカントの物自体説において重要な意味をもってはいるが、ほとんど『純粹理性批判』第一版に固有の思想として消え去ってしまう。カントにそのような試みを強いたものは、超越論的観念論の成立根拠でありながら、同時にその存立を脅かしもするという物自体の根源的両義性に他ならない。そしてその困難さは、カントに超越論的对象の概念を重要な局面で撤回させずにはおかなかつた程に、深いものである。それではカントは、超越論的観念論の学としての閉塞というこうした事態に、如何

に立ち向かって行くのか。存在論としての超越論的哲学がまず、形而上学の可能性を確立すべきだという見通しをカントは棄てない⁽¹⁷⁾。形而上学に関するカントの構想は、超越論的哲学の成否に掛かっているのだ。しかしその経緯を見定めることは、他日を期せねばならぬ。

注

- (1) カント『純粹理性批判』からの引用については、第二版をA、第三版をBとし、頁数を本文中で註記を示す。カントのその他のテクニクからの引用については、マカドゥー版の巻数(ローマ数字)と頁数(アラビア数字)とを本文中で註記する。

- (2) Vgl. A 369.
- (3) Vgl. z. B. H. Cohen, *Kommentar zu Immanuel Kants Kritik der reinen Vernunft*, 1907, in: *Werke* Bd. 4, Nachdruck der 2. unveränderten Aufl.: Hildesheim, 1978, S. 22f.; W. Windelband, *Über die verschiedenen Phasen der Kantischen Lehre vom Ding-an-sich*, 1877, in: *Verteiltjahresschrift für wiss. Philosophie* I. S. 254ff.
- (4) cf. J. N. Findlay, *Kant and the Transcendental Object. A Hermeneutic Study*, Oxford, 1981, pp. 1-4.
- (5) G. Prauss, *Erscheinung bei Kant. Ein Problem der „Kritik der reinen Vernunft“*, Berlin, 1971, S. 91f. Vgl. ditto, *Kant und das Problem der Dinge an sich*, 2. verbesserte Auflage, Bonn, 1977, S. 98ff.
- (6) N. K. Smith, *A Commentary to Kant's 'Critique of Pure Reason*, London, 1923, rpm., 1973, p. 204.
- (7) H. J. Paton, *Kant's Metaphysic of Experience*, in 2 vols., London, 1936, rpm., 1976, vol. I, p. 420ff.
- (8) Ibid. p. 425, note 4.
- (9) Vgl. B 132. 「ただこの考えが、この意識が、カントが『超越論的純理性批判』を著したときから、
- (10) E. Adickes, *Kant und das Ding an sich*, Berlin, 1924, Nachdruck: Hildesheim, 1977, S. 96.
- (11) G. Martin, *Immanuel Kant. Ontologie und Wissenschaftstheorie*, 4. Aufl., Berlin, 1969, S. 168.
- (12) H. E. Allison, *Kant's Transcendental Idealism. An Interpretation and Defense*, New Haven, 1983, p. 245.
- (13) 「この『批判』の「隠微な諸対象」は、現象世界の「隠微な諸対象」を指して悟性諸対象を、それらが存在する「隠微な諸対象」(A 258/B 313) を指して「超感性的」の立場を指して被棄つべき。
- (14) H. E. Allison, *Kant's Transcendental Idealism*, p. 247.
- (15) G. Martin, *Immanuel Kant*, S. 169f. このドクメンテーションは、物自体或るはトームソンが著した『純粹理性批判』の著者の評価が、単に超越論的観念論の「方法論的視点」(ein methodischer Standpunkt) に依拠しつつも、頭知ながらもその力強いつぶさる。

(16) E. Adickes, *Kant und das Ding an sich*, S. 100. アディッケスの次のような見解はより明瞭に、「物自体と超越論的対象との関係を捉えている。「物自体の概念は形而上学的な傾向を有し、その課題はまったく超越的なものの領域にある。それに対して、物自体の認識論的代用物は、経験の可能性の問題に関して新造されたのだ。この代用物は、試みにア・プリオリな経験の諸前提の系列に取り入れられるので、「超越論的」という尊称を与えられている。しかし、たちまち無用のものと認定され、超越論的統覚の統一に取って代わられる」(S. 101)。

(17) Vgl. Bd. IV, S. 279, Bd. XX, S. 206.

(きむら・かつひこ 筑波大学大学院哲学・思想研究科在学中)